

地域公益とは何か？ —地域金融機関の存在理由—

筒井 義郎

〈要旨〉

本稿は、2019年10月20日に甲南大学にて開催された日本金融学会秋季大会の「金融再編と地域金融」というセッション（共通論題）におけるコメントをまとめたものである。セッションでは3人の歴史学者から報告があった。私は、3つの論文のコメントを仰せつかったが、素人の私が、本格的な歴史論文にまともにコメントできるわけがない。このセッションの趣旨説明において、地域金融機関の存在理由は「地域公益」を果たすことだという基本認識が表明されたので、金融研究者として、これらの研究の前提になっている「基本認識」に関する私見を述べることにした。ただし、以下で述べるように、私の考えはまだ試論の域を出ておらず、迷っている中の1つの考えを示すにとどめることにご理解をいただきたい。また、当日のコメントを敷衍していることもお許しいただきたい。

経済学は民間の（私的）市場経済の分析を第1とするが、そこで解決できない「市場の失敗」を補うものとして「公的部門」の分析を第2の重要な課題とする。しかし、最近（とりわけ2000年以降）企業の社会的責任（corporate social responsibility; CSR）の重要性が認識されるようになった。個人にとって、自分の現時点の生活水準だけでなく、良い社会を実現して長期的に生活を向上させるための社会活動も重要であることは言を俟たない。法人企業にも良い社会の実現を目指す活動を求めるのが自然なのかもしれない。しかし、企業は良い製品を安価に提供することが第1の社会的責任であり、効率性の競争に生き残らなければならない。そうした企業に、良い製品を安価に提供する以外の方法で「良い社会を実現する」ことを目標として追加することが本当に良い結果をもたらすのかどうかは、私にはよくわからない。例えば、CSRの研究の多くは、CSR企業がより高い利益を得ているかどうかを調べているが、その結果はさまざまである。2つの目標がトレードオフの関係にあるなら、CSRを求めることは困難かもしれない。そこで、本稿では、CSRがトータルに「公益」をもたらすという希望的観測を前提とせず、CSR以外の「地域公益」の問題を議論する。

（京都文教大学）